

幸徳環境設計

『その鳥は夕方現れ、飛べなかった』

この言葉が、その鳥の生態に関する唯一の記録である。

その鳥とは、『スチーブンイワサザイ』と呼ばれ、スズメ目イワサザイ科に属し、体長は一〇センチメートル程度で体は茶色く、翼は小さく、スズメ目では唯一、飛ぶことができない鳥だったという。

一八九二年、今から一〇〇年以上も前の話である。ここは、ニュージージーランドの北島と南島の間位置する海峡、クック海峡。キャプテン・クック船長がニュージージーランドを探検航海した際に通ったことから、その名が付けられた。

その海峡にスチーブン島なる、島全体の長さが一・六キロメートルしかない小島がある。そこに、海峡を通る船の安全を図るために、その小島に灯台を作ることが決まったことから話は始まる。

この島には灯台を建設するために、遠くイギリスから一〇人の労働者が派遣された。

労働者たちは、日の出と共に、自分の役割である作業を始め、日暮れと共に、その日の作業を終える。そしてその日の作業を終えた労働者たちは、皆で浜辺で焚き火を取り囲み、本国から持ってきた葡萄酒と干し肉を手に、遠い本国の家族を想いながら、おもいおもいに歌っては踊り、楽器を演奏したり、自分の家族の話を、仲間に語らったりするなどして、今宵の宴を興じる。

「あー、たまには干し肉以外の肉が喰いてえな。新鮮な生肉をな。」

労働者の一人が、さも毎日、毎日、干し肉ばかり食っていられるかと言わんばかりに、生肉を本当に口にしてしているかのように、舌舐めずりをしながら言った。

「おい、知ってるか？日暮れと共に、岩場に小さなスズメみたいな鳥が現れるのをよ。一〇匹以上はいるみたいだぞ。なんなら今、捕まえてくるか？」

「知っているよ。けれどおまえ、あれを食えていうのか。とても喰えたもんには見えなけれど。絶対、骨だけしかないぞ。肉ついでるか？まずそうだ、あんなやつのために、わざわざ行くことはないだろ」

「そうだよな、捕まえるだけ、無駄なことだな。でもよ、この島には、他の動物など、何もいないのかよ？」

「いないだろ。だってあいつ、飛んだところ見たことないぞ。羽も小さいし、飛べるわけないだろ」

「それが、なんだって言うんだ？」

「馬鹿か。飛べない、あんな小さな鳥が、生きてこられたって事は、天敵がないって事だ。だからこの島には、あいつと、あいつの餌になる小さな赤いカニしかいないわけだ。わかったか」

「そういうことか」

一八九四年、クック海峡に浮かぶ小島、スチーブン島に、一九八二以来、二年の月日をかけて一つの灯台が竣工した。

建設労働者たちは二年間という月日、一度もその島の唯一の先住民であるスチーブンイワサザイを傷つけたり、捕らえたりすることは無かった。建設労働者にとって、スチーブンイワサザイが日暮れ時に現れ、岩場で餌となるカニを獲るようすは、とても可愛らしく微笑ましく、誰もが心和める光景で、その光景を眺めることが、いつしか一日の日課となり、大切な娯楽の時間になっていた。

「あいつ、もう一度見ていきたいな。喰わなくて良かったよ、可愛いやつだ」

「そうだな、もう一度見ていきたいな」

建設労働者たちは、家族が待つ本国への帰国を前に、新たにこの島で灯台を管理することになる3人の灯台守とその家族と引き継ぎを行っていた。

「でも、夕方までは、あの船は待っちゃくれない。それに、明るいうちに大海原に出ていたほうが安全だ」

「そうだな」

この島にやって来た灯台守の一人、『デイヴィッド・ライオール』という中年男は、不細工ではないが、この年になるまで伴侶がいなく、家族もいなかった。だから、家族がない代わりに『テーブルス』という一匹の猫を伴って、この島にやってきた。

「なあテーブルスよ、静かな海だな」

デイヴィッドは、水平線に沈みゆく真っ赤な夕日を眺めながら、傍らで寝そべっている飼猫のテーブルスを撫でながら、その猫を見やり言った。

「ニャーオ」

テーブルスも、主人であるデイヴィッドに撫でられて気持ちいいせいか、大きな目を閉じながら猫撫で声で反応する。

「それにしても、この島には、何の動物もないようだな。全然、見かけもしない」

もうテーブルスは、反応しなかった。すっかり主人の傍らで、安心して寝入ってしまったようだ。この島では、うちら以外、二つの家族が存在するだけで、それ以外の人間はいない。また、危険な動物も存在しないようだ。だから、本国イギリスの首都、ロンドンで暮らしていた時と違ってテーブルスも、どこでも安心して寝ていられるようだった。

デイヴィッドは、そんなテーブルスを起こさないように、そっと立ち上がった。

「そろそろ俺の出番だ、行くとするかな」

デイヴィドは、独りごとのようにそう呟くと、ゆっくりと一〇人の男たちが二年という年月をかけて造りあげた、島の突端に立つ灯台にむかって歩き始めた。けれど、もたもたはしていられない、一時間もすればすっかり海岸線が闇に包まれる。暗闇の大海原を行きかう船にとって、月の光と星空、そして灯台が唯一の手がかりとなる。デイヴィドは、そんな灯台守の重要な仕事に人一倍責任を感じる男であり、それを誇りに思う男であった。

デイヴィドは灯台に着くと、鍵が掛けられている大きく分厚い頑丈な木製の扉の鍵穴に、先ほど夕方、ティブルスと一緒に寝転がっていた所で日中、灯台の点検や清掃を行っていた者から引き継がれた鍵を差し込み、大きくその扉を開いた。そして薄暗いその中へ入るなり、扉の内側の床に置かれた三つある石油ランプの中から、二つの石油ランプに火を灯した。

灯された一つは、灯台守が夜通し過ごすことになる灯台の一階部分にあたる管理室に置くものである。そして灯されたもう一つの石油ランプは、灯台の明かりとするために、階段で三階はあろうかと思われる高さまで昇って行き、灯台の灯りとするものである。残りの灯さなかった石油ランプは、灯台の灯りの交換用である。

灯台守の仕事は、この灯台の灯りを夜通し消えることがないように管理するとともに、霧で灯りが見ずらくなっている時には、定期的に霧笛を鳴らすことである。

このスチーブン島には、本国のイギリスから三人の灯台守が派遣された。だから、三交代制で仕事をこなしている。

一日目を夜勤。つまり夜通し灯台の灯りを守る仕事に就けば、二日目は、丸一日休暇となる。そして三日目は日中、灯台のレンズを磨いたり気付いた所を点検や清掃などしながらゆったりと過ごす。

そして夜勤に就いた者は翌朝、灯台の点検をする者に、灯台の入り口の鍵を引き渡す。そして灯台の点検をした者は夕方、夜勤の者に鍵を引き継ぐ。これを三人で三六五日、灯台の灯りを絶やすことなく行わなければならない。

デイヴィドは、灯台の灯りを点け終わると、いつものように窯に火を組み、灯台の脇に掘られた井戸から多少塩分を含んだ水を汲み、それをポットに入れ、湯を沸かす。それはデイヴィドにとっては、もう手慣れた作業であった。そして湯が沸くまでの間デイヴィドは、本国から持ってきたお気に入りのコーヒード豆を挽く。灯台守の給金では、コーヒード豆はとも高価な物ではあったが、デイヴィドにとっては欠かせない物であった。

湯が沸き、コーヒード豆も挽き終え、カップに湯を注ぐ頃になるとテーブルスが、いつものようにやって来る。だから、テーブルスが来るまでの間、扉は開けておくのである。

デイヴィドはテーブルスが来ると、コーヒードを注いだカップを片手に持ち、灯台の外に出て、灯台の灯りを確認する。そして暫くの間テーブルスを傍らに置き、手頃な岩の上に腰を掛けコーヒードを飲みながら、すっかり暗くなり灯台の灯りによって映し出された海岸線の幻想的な光を見やる。デイヴィドにとってはこれも、ここに来てからの日課となっている。

「テーブルスよ、俺はすっかり、この塩味が少しいたコーヒードが好きになったよ。初めの頃は、何とも複雑に感じたがな」

デイヴィドは、塩味が少し効いたコーヒードをすすりながら、片手ではテーブルスの背中を摩りながら言った。そして、いつものように、呪文を唱えるようにこう言うのである。

「テーブルスよ、灯台守って仕事は素晴らしいよ。なんせ死ぬまで、この灯台によって創造された、この素晴らしい世界を心行くまで眺めていられるんだもな」

デイヴィドはコーヒを飲み終わると、ゆつくりと灯台の中へ、テーブルと共に戻って行く。そして灯台の中で、灯油や交換部品の在庫状況を調査して記録していく。そして次に聖書を読み上げ、イエスと海に感謝することも欠かさない。また夜明けまでの間、きっかり一時間おきに必ず外に出て、海の様子と灯台の灯りを確認する。

灯台守の中では、居眠りをしたり葡萄酒を飲みながら、一夜を過ごす者もいると聞く。けれどデイヴィドは、灯台守になってから二〇年間、そのような行為を犯したことはない。子供の頃から、やはり灯台守を職業としていた祖父や父親の姿を見てきたからである。

祖父は一〇年ほど前に他界した。海のそばに灯台のそばに埋葬してくれと言うのが、唯一の遺言だった。デイヴィドと父親は、祖父の遺言に従って、イギリスの南西部、コーンワル半島の突端、ランズエンド岬の灯台の傍らに十字架を建て埋葬した。

祖父が若い頃に配属になった灯台であった。父親にとっても少年期を過ごした思い出の場所であった。そんな父親は今でも、イギリスの南部に位置するワイト島の灯台に勤務し、母親と共に海のそばで暮している。

デイヴィドは、そんな祖父と父親に憧れて、一六歳になると灯台守となり、各地を歩き歩いた。けれど、そんな灯台守生活に疑問を感じ、都会の暮らし、普通の暮らしに憧れ、ここに配属になる前の二年間、大都市ロンドンで酒場で皿洗いをやりながら過ごした。

しかしやはり、トンビの子はトンビであると思った。デイヴィドは、灯台の灯りと潮の香りを忘れることができず、港湾局に灯台守の登録申請を行った。すると一日も待たずして、港湾局の担当者から連絡があった。完成間近であるニュージールランドのクック海峡に浮かぶ小島、スチープン島で灯台守を募集しているとの事である。給金も国内の灯台勤務より破格にいい待遇であった。

デイヴィドは、二つ返事で、この派遣を受け入れた。そして飼い猫ティブルスと共に、ここへ渡って来た。

ティブルスもすっかりこの生活に慣れ、満足しているようだった。ただデイヴィドにとって、この島にうちら以外、人間以外の動物を確認できていないことだけが気がかりだった。

岩場では赤いカニとフナムシが目につく程度であり、これといったもの珍しい生物もないようである。また海岸線では時折、ウミガメが確認できたことから、産卵シーズンになれば、人気のないこの島の反対側の白い砂浜は、格好の産卵場所となるだろうということとは想像できる。ただ岩礁の上に、多少の土が覆いかぶさっているような、この小島には多少の木々が生えている程度で森林がないことから、地上に生息する動物たちの棲みかとなる場所は見受けられず、きっと何もいないのであろうと思っていた。

この島に来てから三か月ほど過ぎた頃、デイヴィドがいつものように、コーヒを啜りながら海岸線を眺めていると、ティブルスがやってきた。ただ今日に限ってティブルスは、いつものようにデイヴィドが、コーヒを注いでいる時には現れなかった。この島に来てから初めてのことであった。そんなティブルスに対してデイヴィドは、寝坊をしているなという程度にしか考えなかった。

「ティブルス、遅刻だぞ」

デイヴィドが、目を細めながら優しく語るように声をかけた。

「ニャーオ」

ティブルスが、今まで銜えていた茶色の塊をデイヴィドの前に、そらと言わんばかりに吐き捨て、誇らしげに答えた。

「おやティブルス、これはどうしたんだ？どこから、持ってきたんだ？」

テイブルスが銜えて運んできたものは、明らかに鳥であった。けれどスズメのようなその鳥は、羽がとても小さかった。とても飛べるような鳥には見えなかった。ただデイヴィドはその時は、その飛ぶことができないであろう鳥を海鳥の雛程度にしか考えなかった。

しかしそれからテイブルスは、毎日のように日暮れ時になると一時姿を消し、三〇分ほどするとデイヴィドの前に現れ、その鳥を銜えてきた。デイヴィドは、少し少し疑問を感じ始めていたが、テイブルスの遊びのようなものだと思い、それ以上のことは気にすることとはなかった。

そう、この島には海鳥なんてものは始めからいなかったのである。海鳥が生息していて、親鳥を見かけないわけは無かったのである。飛んでいる親鳥を見かけないわけは無かったのである。

ただデイヴィドは、そんなことすら今は、気付けなかった。

テイブルスが、その鳥を運んでくるようになってから十二日目のある日、テイブルスは何も銜えず日暮れ時に、デイヴィドの前に現れた。

「おや、テイブルス。今日は、どうしたんだ？。もう、飽きちゃったか？」

デイヴィドが、いつものようにテイブルスの頭を、三本の中指でそっと撫でながら言った。

「ニヤーオ」

テイブルスは、いつものようにデイヴィドに返事はしたものの、どこか淋しそうに感じられた。

それからテイブルスが、その鳥を銜えてくることは無くなった。

テイブルスが、その鳥を銜えてこなくなっ
てから一週間はたったであるう日、デイヴィドは、ふと空を眺めた。

「あ！」

デイヴィドは、つばを飲み込んだ。

そうデイヴィドは、空には鳥一羽も飛んでいないことに気付いたのである。だからあの鳥が、海鳥の雛であろうということは無いということに気付いたのである。そして、あの鳥が、この島の住民であることに気付いたのである。それからデイヴィドは、島の隅々まで、その鳥をティブルスと共に探し求めた。けれど、その鳥を見つけることはできなかつた。

デイヴィドは、少し傷みかけたその鳥の死骸を拾いあげ、直ぐに標本の作製にとりかかった。そして全部で一羽のその鳥の標本を作り終えると、完成した標本を本国の父の知り合いの鳥類学者ウォルターの元に送り、その鳥に関して調べてもらうことにした。

デイヴィドは、子供の頃から昆虫や小動物が好きで、様々な標本を作製する技術を備えていたのである。またティブルスが、その鳥を宝物のように集め、涼しい場所に置いていたのが幸いした。

その鳥の標本を鳥類学者ウォルターに送ってから二か月後に、ウォルターから回答が送られてきた。

その回答書の見解は、次の通りである。

一、その鳥は、スズメ目イワサザイ科の新種と思われる。

一、その鳥は、恐らくその島だけに生息するものであると思われる。

一、その鳥は、翼の大きさ、体の成り立ちから推測すると、飛ぶことができない。

一、その鳥は、外敵が存在しないその島だからこそ、今まで生存していたのだろう。

一、その鳥は、もう見かけることがないのであれば、恐らく絶滅したのであろう。

一、その鳥を、スチーブンイワサザイと、命名する。

以上。

デイヴィドは、その手紙を読み終えると、頭を抱えながら暫くどうすることもできなかつた。

その後、デイヴィドが、その鳥を目にする
ことはなかった。これでスチーブン島には、
本当に人間と飼い猫以外の動物は居なくなっ
たのである。

デイヴィドは六年間、テイブルスと共に、
この島で過ごしたが、テイブルスの死を機に
本国に帰国することにした。テイブルスの骸
は、あのデイヴィドと共に腰を下しながら、
いつも海原を眺めていた岩の傍らに埋葬した。

一八九四年、鳥類学者ウォルターは、学会
に新種の鳥を発表した。

(綱) 鳥綱

(目) スズメ目

(科) イワサザイ科

(英名) スチーブン・イワサザイ

(記事) その鳥は夕方現れ、飛べなかつた。
すでに絶滅したものとと思われる。

原因は、一匹の猫。

参考文献

・黒川光広著「世界の絶滅動物」

(童心社)

・今泉忠明著「絶滅動物誌」

(講談社)

・猪又敏男著「地球から消えた生物」

(講談社)